

講義録

神戸女学院大学女性学インスティテュート第2回映画会報告 ヤンヨンヒ監督作品『スープとイデオロギー』

南 出 和 余

The 2nd Film Screening Symposium at Kobe College Women's Studies Institute:
The Film "Soup & Ideology" by Dir. Yang Yonghi

MINAMIDE Kazuyo

神戸女学院大学女性学インスティテュート第2回映画会報告

映画：『スープとイデオロギー』（ヤンヨンヒ監督／2021年制作）

日時：2023年11月25日（土）13：00～16：40

場所：尼崎市女性センター・トレピエ

後援：西宮市・尼崎市・芦屋市

企画立案：南出和余・瀬戸智子

参加者：学外80名＋学内31名（主催関係者を含む）

本映画会は、広くジェンダーに関する映画や女性映画監督によるドキュメンタリー映画の上映および監督による講話を通じて、社会を知り、考え、そして語る機会を学生教職員および地域の方々に提供する機会として設けられている。第2回目となる今回は、ヤンヨンヒ監督の『スープとイデオロギー』を取り上げた。同映画は、1948年に起きた韓国の「済州島四・三事件」を経験した監督の母親が主人公である。監督との母娘関係や監督のパートナーとの出会いと交わり、特製スープの伝授、そして徐々に進む認知症など日常の安心感の中で封印されていた辛い過去が徐々に明らかになっていく姿を、最も身近な娘の立場から優しく描かれている。ヤン監督の映画制作は監督の生き方そのものであり、また本作のみならず、これまでの監督の映画作品『ディア・ピョンヤン』『愛しきソナ』、劇映画『かぞくのくに』は一貫して、家族、国家、社会と向き合うことを問いかける傑作である。

映画会は、2023年11月25日（土）午後に尼崎市女性センター・トレピエを会場に開催され、同映画の上映およびヤンヨンヒ監督による講演が行われた。開催にあたっては神戸女学院大学女性学インスティテュートが主催となって、同インスティテュートの助成を受けた研究会「ドキュメンタリー映像によるジェンダー教育の可能性（2）」（代表：南出和余）が共催を担った。

ヤンヨンヒ監督トーク収録

1. 映画への誘い

皆さん、映画をご覧頂いてありがとうございます。いろんな場所でトークをするんですけど、韓国だったり、日本だったり、他国でもいろいろと企画が決まっていまして、来年はハーバード大学でもやります。観客の方が全員学生さんとか、全員韓国人とか、韓国だから全員韓国人とは限らないですけどね、あるいは映画学校で語るとかね、そういうのだったら絞って語れるんですが、いろいろな世代、いろいろな状況、いろいろなアイデンティティの方々がいらっしゃると思うので、ちょっと話があっち行ったりこっち行ったりするかもしれません。でもいろいろな方に観て頂きたくて、とにかく間口を広げて作ったんです。それはたぶん、『ディア・ピョンヤン』と『愛しきソナ』、『かぞくのくに』という私の今までの作品をご覧頂いている方は、「すごく入りやすい、分かりやすく頑張っているな」というのがお分かり頂けたんじゃない

ないかと思います。

ドキュメンタリーを観に映画館まで来て頂くというのはすごい大変で、「テレビでやったら観るわ」「Netflix ないの？」みたいな、そういう配信を待つ人も多いですし、「近所でやれへんのかな」とか。あんなに映画好きの韓国人の中の映画ファンたちも、ドキュメンタリー映画を観に映画館に行くというのはすごくハードルが高いんですよ。なんか、重い、暗い、難しいっていう、ちょっと気が落ち込むっちゃうかなっていうイメージがあって。パーンって、『ミッション・インポッシブル』みたいにスカッとしないのでね。いろいろ社会問題だったり歴史的な悲劇だったり事件だったりを扱っていることが多いですからね。でもドキュメンタリー好きな人は放っておいても来てくれるんです。放っておいても、というのは言葉が悪いんですけど、常に自分がいつも行くドキュメンタリー映画館をチェックして、今何やってるか、ってね。ピアのアプリで、私も毎晩見えています。それをチェックして、案内しなくても来て頂けるんですけど。

今回のこの映画に関しては、やはり「^{チェジュド}済州島四・^{さんじけん}三事件」という大虐殺悲劇について、少しでも多くの方に知って頂きたくて、どうやって入り口を広くするか。「なんかええらしいで」「面白いらしいで」「笑えるらしいで」「日本人も出るらしいで」みたいなね、そういうちょっとフックがあった方がいいんじゃないかっていうのを意識して作ったのも事実です。

2. アニメーション挿入の背景

アニメーションの部分は、アニメーションだけでもキャラクター一人一人にセリフを喋らせてないですよ。最初からの計画と言いますか、私の演出で、全て私のナレーションだけに。あと、爆弾が落ちるとかそういう効果音を弱くして、音楽で盛り上げる。音楽で盛り上げるっていうのは嫌いだったんですよ。音楽で盛り上げてる映画が嫌いなんです。シネコン映画は私は大好きです。『スパイダーマン』が大好きなんです。でも音楽で盛り上げるドキュメンタリー、「さあここで泣いてください」みたいなのがすごい苦手なんです。でもこの映画ではちょっと音楽で盛り上げて、ナレーションと音楽でアニメーションができないかなということもすごくこだわって作りました。音楽監督は、パク・チャヌク監督の映画全般、『オールド・ボーイ』から始まって、『別れる決心』、『親切なクムジャさん』、『お嬢さん』とか、ほとんどの音楽を担当し、『タクシー運転手』の音楽もなさっていますチョ・ヨンウクという方が、初めてドキュメンタリーの仕事をしてくださしまして、本当に予想以上、期待以上の音楽を作ってくださいました。音楽で盛り上げるけれどもいかにもにならない、まあ言うたらダサくならないということなんですけど、ちょっと頑張った部分もあります。

そういうところとか、なんとなく質問が来そうな話を先にしてるんですけど！「なんでアニメーション作ったんですか、入れたんですか」ってね！

十代のオモニ（母親）の写真が一枚もないんですよ。それはそうですね、日本で生まれて貧乏だったのもあるけれども、中学の時に空襲でまず家が全部焼けて、逃げながら家族で^{チェジュド}済州島に避難する。避難するぎゅうぎゅう詰めぎゅうぎゅうの船に乗るためにはなるべく荷物を小さくする。その後、済州島に渡ったら、たぶん当時の商業都市の大阪から行くと1945年の済州島って

いうのは本当に貧しい島だったと思います。でもすごく共同体意識が強く、オモニはすごく村の人によくして頂いたって言ってたんですけど。そういう中であまり写真もなかっただろうに、その後でやっぱり密港船に乗ってくるっていうところでは一切荷物を持ってないんですよ。密港船に乗るまで30キロの道を歩いたって言ってますが、あそこは「密港船に乗りに行きます」って言ったら捕まります。もしくは殺されます。「なんで逃げんねん、お前は赤か」って言ってばっさり斬られるわけです。だから弟と妹を連れて、近所に住んでる子が散歩してるみたいなふりをして逃げたわけです。だから、水も持てない。餅もおにぎりも持てない。何時間何日かかるかもしれないけど、とりあえず港に、朝天面チョチョンミョンにある大きな港だったらしいですけど、行ったんです。港のギリギリまで密港船は来てくれません。隠れながらふっと乗らなアカんで、小さいポートみたいなのに乗ったらいいんですけど、朝天チョチョンまでずっと歩いたから、何も持っていけなかったっていうので、オモニの10代、いわば18歳、19歳くらいまでの写真が本当に1枚もないんです。だからオモニの人生を描くのに、オモニの子どもの頃から済州島に行ってまた戻ってくるっていう話をどういうふうに描こうかってなった時に、アニメーションしかないと思ったんです。こしだミカさんという私が大好きな絵本作家さんが関西にいらっしゃいます。コテコテの大阪弁の方なんですけど、こしだミカさんに、「どうしてもあなたの絵でやりたい」と言ってお願いしました。そうやってアニメーションが入ることになりました。後々予算がすごくオーバーして、私の夫が予算のためにすごい苦しんだんですが、そういう意味でアニメーションも入った。

3. 「済州島四・三事件」を知らせる

この映画は「四・三事件についての映画」ではないですよ。うちのオモニの人生についての映画なので、四・三事件についてこの映画から全部分かるってことは、とんでもないです。最低限この映画を観たら済州島四・三事件という言葉は知れる。世界中のどこの観客でもこの映画を観て済州島四・三という言葉だけでも覚えてほしいと思って、結構頑張りました。

済州島四・三ってこの映画で初めて知ったって方もとても多いんですけど、日本のジャーナリストの方々も結構多かったですけど、韓国でも若い人で知らない方が多くて、オモニが私と夫と3人で70周年の式典に参加した2018年の70周年の時にも、韓国では「済州島四・三事件を知りましょう」という一大キャンペーンだったんです。だから追悼式で韓国に滞在している時も、ホテルでテレビをつけるとチョン・ウソンとかキム・ウィソンとか売れっ子の俳優さんたちが出てきて、「皆さん、済州島四・三を知りましょう、勉強しましょう、済州島四・三は済州島の歴史ではなくて大韓民国の歴史です。四・三を知らずにこの国のことは分かりません」みたいな感じで、すごい一大キャンペーンでした。私も、ここまでやるんだと思ってびっくりしました。各テレビ局も一斉にいろんな四・三についての長短ビデオクリップを発信しています。YouTubeで探してみてください。ちょっと韓国語が分からない方はしんどいかもしれませんが、韓国語、朝鮮語の分かる方はYouTubeで各放送局の四・三を検索するとドゥワーって出てきます。いろんな角度から、いろんな生存者の方の証言なんかが出てきます。その時はたくさん作られて、だいたい若い方にも浸透したんです。やっぱり済州島にいる若い子た

ちは学校でもよく教わる。それありますよね、沖縄の問題は沖縄の学校と東京や北海道の学校ではちょっと温度差があると思うんですけど、韓国でも済州島の若い子は、家でお葬式があったり親戚がたくさん亡くなったとか殺されたって話をいつも聞きますから、済州島の若い子は知っていてもソウルの若い子たちは知らないっていう、そういう温度差もすごくあったんですが、最近やはり四・三を扱ったドキュメンタリーがすごく増えてきました。もう少ししたら劇場映画も含めてどんどん増えてくると思います。『チスル』という作品が既にありますけれど、いろんな角度から作られるんじゃないかと思います。

そういう四・三を映画に入れるってなったら…。これね、『ディア・ピョンヤン』を作る時もそうなんですけど、帰国事業をどうやって説明というか、どうやって入れようかっていうことになった時もそうなんです。今ちょっとアウシュビッツとかイスラエルの話をしたくないんですが、ちょっと今のガザの話は置いてですよ、ホロコーストがあった、アウシュビッツがあってユダヤ人がドイツヒトラーのナチスにたくさん殺された、収容所に送られたっていう前提の映画がすごくたくさんあります。素晴らしい映画がたくさんあります。今も毎月のように新作が生まれています。私たちは、日本まで渡ってこられたちょっとレベルの高い作品だけを観られるわけです。海外の配給会社を買ってくれるから、こうやって海を渡ってきてくれるわけです、映画がね。でも海外に行く力はないけれど自国だけで上映される映画もたくさんあるわけです。そういうのも含めるとすごいたくさん今も新しいものが、素晴らしい作品が生まれています。だからアウシュビッツの話をしようとする時、ドイツのユダヤ人の話をしようとする時、説明が要らない。さっとストーリーに入れるんです。しかし、この四・三もそうなんですけど、帰国事業とか在日の話をしようと思った時に、どこから説明していいのか。なんで日本にコリアンがこんなにたくさんいて、北支持と南支持に分かれていて、また日本から北朝鮮に9万4千人弱というあんなにたくさんの方の在日が渡って行ったのかっていうのを細かく説明すると、映画にならないですよね。それはレクチャーになってしまう。そこは常に私の大きな悩みで、『ディア・ピョンヤン』は最初にダットと文字を流すという方法を取りました。自分では格好悪いと思ってんですけど、海外の大学では文字だけで授業ができるって言って、最初の4分だけ授業で使わせてもらっていいかって言って、もう本当にずっと使っているハーバード大学の先生とかもいらっしゃるんですね。あの4分間文字が流れるその1枚だけでも論文が書けるっておっしゃっています。そういう前提になる、共通意識をどうするかっていうのはすごい難しい。だから『パチンコ』みたいなドラマが出てきたり小説が出てくると、すごい嬉しいですね。世界中でヒットする、世界中でベストセラーになると、やっぱり世界中の人が在日についてちょっとでも知ったり、パチンコ屋さんが多いとかそういうのもちょっとでも知られていったり。そういうことがたくさん起こらなきゃいけないし、私ももうちょっと頑張って、来年還暦ですけど、あと何作作れるか分かりませんが、もうちょっと頑張って作品を世に残る作品を、小っちゃい力ですけども微力ながら作らなきゃいけないなと思うんです。そういう時に、一人の人生を通して見る歴史っていうのが私はすごく好きで、常に自分が映画を選ぶ時にも、映画ってほとんどそうだと思うんですけどもね、すごい好きなんです。

4. 映画の中のさまざまな扉

『スープとイデオロギー』は、うちのオモニから入っていくんですけど、病院のベッドで寝てるオモニが「済州島のオモニたちがいっぱい殺されたんやで、学校に並べられてダダダダっていっぱい殺されたんやで」とか、訳分らないことを急にオモニが言うところから映画が始まります。なんかお母ちゃんが入院してはるなあという画から始まる。お母ちゃんから入って、その後、この映画にはたくさんの^{ドア}扉があります。在日という扉があるし、帰国事業という扉があるし、朝鮮総連という扉があるし、孫とか仕送りとかですね、おばあちゃんの愛みたいなのがあるし、娘との確執みたいなのもあるし、娘の晩婚とかですね。あと、ご飯のスープ、母から娘が多いんですけど、母からお婿さんへっていう受け継がれるスープの話とか、いろんな扉がある。結構余裕があったり、いろいろ事前の知識があったりする方は、全部の扉を開けられると思います。でもね、1個でもいいんです、1個でも何か残ってくれたら。四・三も分からんし、在日のことも全然分からんけど、認知症のことだけめっちゃよく分かったわっていうお客さんもいるんですよ。それでも全然いいんです。認知症で今悩んでるお客さんはたくさんいらっしゃる。そういういろんなディテールで自分が開けられる扉を開けて、たくさん、もっと大きな、最初はお母ちゃんの画だけだったのに、もっと大きな画を見て、時代が見えたり、歴史的な事件が見えたり、今の社会の中で生きるマイノリティが見えたり、いろんな1時間57分を見て、またお母ちゃんに画が終わって出口から出ていくっていう、そういう映画にしようと思って作りました。

だいたい映画を作る時は入り口と出口を考えて作ります。ドキュメンタリーですから、まず台本を書いたりはしません。テレビのドキュメンタリーはそうやって作る場合もありますけれど、そうやって作る場合も多いんですけど、私は一切書かないし、予定調和がつかまらない。例えばオモニが面白いことを言ったり、すごいセリフを言った時に、カメラのスイッチ入ってなかったとか、音がちゃんと録れなかったとしても、「オモニ、今のもう一回言って」っていうことも絶対しません。オモニは女優じゃない、俳優じゃないので、それをやっちゃうとだんだんやるようになる気もするし、カメラで生活を撮っているだけで十分すごい迷惑をかけてるので、これ以上役者でもない人に協力を要請するというかやらせるというのが、私は「超えちゃいけない線」のような気がしてます。たまにね、テレビに限らず、映画の方でもいるんですよ。「あ、すいません、もう一回言ってもらっていいですか」とかね。そういうのをやる人はいるんですけど、私は絶対それはしません。今の言葉を録っておくべきだったのに、とか思って録れなかった時は、もう忘れます。聞かなかったことにするというか、またそのうちええこと言ってくれるやろうって感じで、忘れるようにしてます。もしかしたらドキュメンタリーを撮ってる人がいるんちゃうかなと思って言ってるんですけど、ちょっとでも参考になればと思います。そうやってこそ、常に、ごめんな、プライバシー侵害してごめんなという申し訳ない気持ちがあってこそです。親子であっても、被写体と撮る人、監督というかカメラという撮る側との信頼関係がドキュメンタリーは全てですから。うちの家族は20年以上カメラでずっと撮られているので、娘からしつこくしつこく撮られているので、撮られることには慣れていますけれども、だからすつごく鋭いんです。「今日はもうカメラ止めとき」とかポンと言

うんですよ。自分が気分が悪い、他のことを考えているというか、今日は撮られたくないと思ったら、「今日はカメラ止めて」とか言うんですよ。なんか、だんだんお母さんのほうが上手になってきたなという感じがしょっちゅうしていったんです。

そうやって「家族三部作」にいつの間にか、なってしまいました。『ディア・ピョンヤン』、『愛しきソナ』、『スープとイデオロギー』という三本の映画ができました。

5. オモニとヨンヒ監督

アボジ（父親）を主人公にしたのが『ディア・ピョンヤン』、^{ピョンヤン}平壤で生まれ育った私の姪を主人公にしたドキュメンタリーが『愛しきソナ』です。ソナが今30歳になりました。アイスクリームを食べているチビちゃんが30歳になったんですけど。まさかオモニの映画を撮るとは思わなかった。どっちかという、オモニのだけは嫌だった。映画で私とオモニがお金のことでちょっと喧嘩しているのをお見せしていますが、カメラの前だからあれぐらいですよ。カメラがない時は、もう恐ろしいですよ、本当に。あれはカメラ持てないのですね、ここに立ててあるんですけど、オモニはチラチラとカメラをね、スイッチ入ってるのか入ってないのか、チラチラ見てるんですよ。でもだんだんお金の話になると、お金でもう頭がいっぱいになるから、カメラのこと気にならなくなって。何バージョンかあったんですよ。これはあまりにもちょっとエゲツないなと思ったり、そっちの方が面白かったかなと後で思ったりしたんですけど。

親が年を取って収入を得なくなって、年金生活になって、そこでなんとか生活していければいいんですけど、うちの親の場合、特にオモニは、平壤への仕送りっていうのが人生なので。年金って2ヶ月に1回振り込まれるじゃないですか。あれ毎月の方が良くないですか。なんか気が大きくなるみたいなんですよ。2ヶ月分振り込まれると急になんかパツと大金を手にしたみたいに気前が良くなって、パーン送っちゃうんですよ。すぐ郵便局に行って。今は郵便局から送れなくなっちゃいましたけど、郵便局に行って送ったり、総連の方で北に行く方、知り合いがいたら、その方に預けたりとかして。「オモニ生活費どないするの」―「あんたおるやんか」って言うんですよ。「あたし?!」みたいな。私は家賃が必要やし、オモニは家賃要らんやろって。あの家はオモニが建てたんですよ。私は家賃がなかったら家も追い出されるし、貧乏監督やし、申し訳ないけど、どないせーちゅうのって。とにかく娘はなんとかなるっていう、あの思い込みが恐ろしくてね。どっからアイデアが生まれたのか分からないけど、「うちの娘はなんとかなる」と思ってたみたいなんです。だから、やっぱりサンタクロース人生ですから、平壤にどんどんどん送ってきたので。別にお金がたくさんあって送っているわけじゃないんです。大金を送っているわけでもないんです。「どうやって何十年も送りはったんですか、何の商売してたんですか」って聞かれるんですけど、本当に、息子（兄）たちには一回送る時に20万30万とか送るけれども、例えば親戚だったら、親戚の近さ遠さとかです、関係によってですよ、5万だったり3万だったり。いろいろあるんですけど、一気にドーンと送るより、北朝鮮というか、すごく経済的な格差があるしんどい国になると、少額でもコンスタントに外貨が入るっていうのはすごく助かるらしいですね。でも向こうも向こうで、人が病気になることもあるし、誰かが結婚することもあるし、狭い家に三世代住んでるとか、そうい

うところもあったりして、いろんなお金の入り用がある。それは人の生活どこも一緒ですよ、日本も一緒だし向こうも一緒です。そういう時に頼られるんですね。オモニがずっとサポートしてきたから、あのオモニやったら送ってくれるっていう確信があるわけですよ。北朝鮮の元山とか清津とか、清津の親戚からも手紙が来るわけです。オモニは「そんなみんな送てられへん」と言って一部に送るんですけど、送ってない人がいると眠れなくなるんです、ギルティ感じて。こっちはオモニに鬱になられると困るわけですよ。アボジがそのうち脑梗塞になって2009年に亡くなったら、オモニが一人暮らしになると、お金の催促は100%私に来るようになったし、もっともっと孫たちも大きくなっていくし、北もいろいろ大変になっていって、格差がすごい、値上がりがすごいとかなっていった。

とにかく私がオモニをサポートしてたのは、オモニのためではなくて、オモニが元気じゃないと私が仕事できないという、結局私のためなんですよ。それはすごい分かっているんですけど、もうそれしかないと思って。私が電気代とか滞るぐらいに、恥ずかしい話ですけど『かぞくのくに』撮っている時にアパートの電気切れたんですよ。『かぞくのくに』の撮影現場に朝日が昇ると窓から光が差すから、その光でシャワーを浴びて、なんとかお湯は出たんですよ。シャワーを浴びてドライヤーが使えないからボトボトの髪でそのまま現場に行ったんです。でも撮影してたら乾くんで、みたいな感じで生活しつつ、オモニと喧嘩しつつ。

6. 済州島四・三事件について語り出したオモニ

その間です、オモニがちょっとずつ四・三^{よんさん}の話を始めるわけです。遡ると、人がずっと秘密にしている問題、誰にも言わずに生きてきたこと、もしくは「そうじゃない」と人に言ってきたこと、それを本当のことを明かすというのは本当に大変なことで時間がかかるんだな、と。考えてみると、例えば、いわゆる従軍慰安婦といわれるハリモニたちも、解放されて急にポンと言えたわけではない。ずっと隠していて、隠していて、隠していて、家族に反対されたり、一部の人から村八分にされたりしながら、本当のことを言うべきだというハリモニたちがいたり。それこそ、話が飛びますけれども、性暴力をすごく時間が経って訴えるということがあった時に、「なんで今更言うんや」ってありますよね。私、本当にね、この年になって50過ぎてね、私にもやっぱり人に言わずにきたことがあって、この年になったら何か言っていいたかもしれないって思えることがあって、こんなに時間がかかるのかとすごく自覚をしたんですね。オモニの中でもあの虐殺を見て婚約者を殺されて、婚約者の家族みんな殺されているという、そのことをずっと言わずにきたんです。ずっと総連の活動をしてきたオモニなので、韓国にずっと行っていませんから、韓国の情報にちょっと疎いんですね。だから韓国で本当にもう四・三がオープンにだいぶなって、ちょっとずつ生存者が語って、国のお金で研究所ができて立派な大きな公園ができて、たくさん調査をしている、生存者を探していると言っても、オモニは信じなかったんですよ。もっと遡ると、『ディア・ピョンヤン』作っている時は、うちのオモニは済州島行ったことないと言ってたんです。オモニは日本生まれなので。

私が初めて済州島四・三という言葉聞いたのが、1997年にアメリカに勉強しに行った時でした。英語学校に最初通っていた時に先生の家に遊びに行ったら、旦那さんが歴史学者で、先

生が「この子はすごい面白い宿題エッセイをいつも書くんよ」って言って、「日本から来たんだけどコリアンなんだって、ノースコリアに兄弟がいるんだって」って紹介してくれたんです。そうしたら旦那さんが、在日だなんてピンと来たんですね、「ご両親の故郷はどこ」って聞いたから、「済州です、^{チェジュアイランド}済州島です」って言ったんです。そしたら「虐殺あったとこやね」って言ったんです。私は、済州島は美しいリゾート地っていうイメージと、植民地の時代やいろいろあっただろうけど、「済州島で虐殺ってどういうことですか」って言って。「あー、あんまりね、具体的に正確に半島の歴史を知らないアメリカ人が大雑把に知ったかぶって、このおっちゃん、ええ加減なこと言うて」って思って、1980年の光州と間違ってるんやなって思ったんです。「80年の光州を言ってるんでしょ、すごい虐殺があった」って言ったんですよ。「ノーノーノーノー」って、「君は知らんねんな、自分の親の故郷のことも知らんねんな」って感じで。そのおっちゃんニューヨークのあのどっかい市立図書館、ワイズマン監督が撮った市立図書館に毎日行って本を読むおっちゃんなんですけど、「調べてみなさい」って言うんですよ。その日からニューヨークのアパートで、どういうことやと思って検索したら、出てきたんですよ「済州四・三」って。えー、とか思って、さすがに英語の本はあまりなくて、済州四・三を英語で読むだけの英語力も当時なくて、日本で本がどれくらいあるのかなと思ったら、四・三の本をたくさん出してる出版社が東京にあります。在日の社長さんがやってらっしゃるんですけど、そこに本をたくさん注文しました。で、読み始めたんです。

『ディア・ピョンヤン』を作ってる時に、ちょっとアボジに聞いてみたんですよ、「アボジ、済州四・三って知ってる？」って、大阪帰った時に。「あーあー」って、何も言わないんです。「でもあれ1948年に起こったってことは、アボジは1942年に日本に来たから直接見てないねんな」って。「まあでもこの辺は関係ある人多いよ」って言うんです。自分の故郷のこと聞かれたら一生懸命いっぱい話してくれたり歌を歌ってくれたりするアボジのあのキャラなのに、そっけない返事だったんですね。「でも、この辺の人いっぱいおるけど、あんまりそのことはな」みたいな感じだったんです。「オモニは日本生まれやろ？」—「うん」—「済州四・三は知らんの？」—「知らん」。「済州に行ったことない」って言ったんです。で私は、うちのアボジが総連の活動家になったのは、済州四・三で直接家族とか親戚が殺されてなくても、故郷であれだけのことがあったら遠い親戚とか昔の幼馴染が殺されたかも分からないし、独裁政権に繋がっていくわけなので、それもちょっと影響があって「No more サウスコリア」みたいになって北を選んだんかなって、それも影響してるのかなって、ちょっと思い始めたぐらいだった。オモニは関係ないねんなって思ってたんですよ。

そこからだんだんね、「オモニも済州島の出身、オモニのオモニとアボジも済州島の人やろ？オモニ済州島行ったことないん？」—「ない」。「済州島行ってみたい？」って言ったら、「まあまあ、ちょっとおったし。」「ちょっとおったし」ってバツと言ったんですよ。「ちょっとおったってどういうこと？」って言ったら、「うるさいな、いちいち」みたいな感じだった。それから何ヶ月か経ってまた聞いてみると、「あの、空襲があって疎開したんや」とか、ちよつとずつ、ちよつとずつ聞くために何年もかかったんですね。だから『ディア・ピョンヤン』作る時は、どっちかっていうと、この済州四・三に関して私は本をたくさん読んでいたんですが、

もう済州四・三まで入れたら5時間ぐらいの説明映画になってしまうから省こうと編集マンと相談をして、一切「済州四・三」は入れず、「帰国事業」に重点を置いて、うちの家族を描くということにしました。

その後『愛しきソナ』になって、私が『ディア・ピョンヤン』の発表から韓国に行き始めたので、韓国の話をたくさんするようになりました。民主化された韓国の話をオモニにたくさんしたら、「へー、そんな変わったんかいな」みたいな感じで、とにかく韓国って言うと、「あー」ってアレルギーみたいな反応があるんですよ。「あー、韓国はもう嫌、もう韓国は残酷」みたいな。どこの国も残酷なところがあるし、「オモニ、北も結構残酷なことやってるよ、どこの国もあるやんか、なんで韓国だけそう言うん」って言ったら、「あんたは知らん」って終わるんですよ。おいおいとどっか行ってしまうんですよ。アボジはね、苦しいこと聞かれると私と面と向かって一緒に考えたり語ってくれるんです、正直者というか。オモニはね、都合悪かったらおいとどっか消えるんです。テレビで拉致問題始まったらおいと消えるんですよ。で、そんな感じなんかかなと思ってたんですけど、だんだん四・三のことを、大統領が認めたらしいとか、認めて謝罪もしてるっていう話をする、オモニがだんだんちょっと変わってきました。それで、「実は…」みたいな感じで、「川が真っ赤に染まっててん」って言うんですよ。「川が真っ赤に染まったのを見ながら逃げてきたんや」と。オモニは弟も妹もみんな北に帰国させたんですよ。あとで合点がいったというか、その私のおじさんが何回か私にね、北朝鮮で会った時に、「オモニとおじさんはな、命がけでいろんなことを乗り越えてきた。ヨンヒには分からんやろなー」とかってよく言ってたんですね。このことを言ってたのか、と。で、だんだんだんだんオモニが「弟は小学生やってんけど、小学生やのに警察にしょっぴかれて、なんかこう爪に櫛みたいなのを刺されて、小学生にそんな拷問するんかあとか、おばあちゃんがすっ飛んで行って警察署で大げんかして、お前ら人間かあみたいな感じで」って。それで子どもを連れてきたとか、そんな話をいろいろしてきて。

2009年に私のアボジが亡くなってからですね、婚約者がおったっていう話が始まるわけですよ。「なんで今になって！映画何本作った思ってたの」みたいな。3本作ってその話か、みたいな、めっちゃ遡らなあかんやん、とかなって、「婚約者がおるってオモニすごいことやん、殺されたとか、なんで言ってくれへんかったんや」って言ったら、「そんなん言えるかいな」ー「いつの話やねん」みたいな。「いやいや、男の人は何歳になっても嫁さんの昔の男の話は聞きたくないもんや、あんたも気をつけよ」とか、訳分からん話をよく私に何回も言ってる。私も今それを守ってますけどね。それでだんだんそういう話をしてくれるようになりました。これはちょっと、一応ドキュメンタリーを撮ってきた監督としては、ただ話聞いてるだけにしとくわけにはいかんと、だから一応オモニが話してくれる度にカメラで撮ってたんですよ。で、アボジが亡くなった後、『かぞくのくに』を撮る直前くらいからかな、オモニが脳動脈瘤が見つかったり入院をするようになったりした時も。入院してる時って暇だし、時間があるので、ずっと天井見て寝てるといようなことを思い出すみたいで、結構入院中にいろんな話をしてくれたので、たくさん撮ったりもしました。

この四・三の衝撃、それもね、オモニもずっと胸の奥の奥にしまいこんで、蓋をして、重石

をして、鍵かけてた思い出なので、一気にドーッととは出てこないんですよね。一回ちょっと話したら「あーもう忘れたわ」って言ったり、でも正直、「忘れたわ」っていうのもね、本当に忘れたのか、もう言いたくないのか、思い出したくないのか、分からないです。これはオモニにしか分からないですけど、今日は止めとこうって言ったり、ある日は私が質問してないのに、オモニがわーって言ったり、「昨日言ったやろ、もっと思い出したわ、夢も見たわ」って、わーと語る日もあったりとか。その四・三の証言をずっと断片的に記録はしていたんです。

さあ、これをどうやってドキュメンタリーにするかっていうことで、ちょっと悩んでました。でも正直家族のドキュメンタリーもうええやろって思ってたし、もう3本目お客さん誰が見てくれんねん、みたいなね、ヤンヨンヒの家族もういらんいらんみたいな、too muchっていうね、お腹いっぱいって言われるやろうなとも思ってたし、実際言われてたんですね、「いつまで同じ話ばかりやってんねん」ってね。「家族の話や自分の話いい加減にして、次いかなあかんのちゃうか」みたいなことを結構言われてもいました。今回『スूपとイデオロギー』に対して、パク・チャヌク監督がですね、『別れる決心』『オールド・ボーイ』のパク・チャヌク監督が、「ヤンヨンヒはもっともっと家族の話を煮出して、それを私たちはもっと噛みしめなければいけません」みたいなお言葉をくださいまして、それをこれ見よがしにいろんなところで、本の帯につけたりですね、SNSでわーってやったらね、ピタッとね、「いつまで同じ話してんねん」がなくなりました。「いやー、どんどん頑張らなあかんよね」とか皆さん言ってくれるようになったんですけど、やっぱりたまには大御所のお言葉も頂くもんやなと思って！

7. もう一人の存在

で、どうやって映画にしようかと。まあ、済州島に住み込んで新しい映画作るわけにもいかんし、もう全て第一歩がお金なので、ただでさえ生活カツカツだし、もうどうしていいか分からないからオモニの証言は短編映画ぐらいにして、次行こうかな、みたいな感じで考えてた時に、変な男性が私の人生に現れたわけですよ。ミッキーマウスのTシャツ着てたお兄ちゃんね。なんかね、ご縁というか、今のところまだ仲良くしてますけれども、今日、すいません、一緒に来なくて。私よりも彼をいつも待ってるお客さんが結構多くてですね、最近すごい人気者になっちゃって。韓国では映画見た俳優さんたちにすごいモテちゃって。エッセイに全部赤裸々に書いてるんですが。私の信頼できる友人の友人というのが分かったので、あの子の友だちやったら変なストーカーやないやろうとか思って、もう50過ぎてるし、彼が何歳か知らんけれども、最初から探り合って時間かけてお互いを分かり合って、そんな面倒くさいことやってられへん、みたいな感じで、パッと会って違うなと思ったらパッと別れた方がいいし、パッと会ってええなと思ったら暮らしてみるくらいでもええかなと思って会ってみたんですけど、印象よくて、何回かデートしながら「オモニの証言を撮ってる」と話したんです。彼はもともとは私に惚れたんじゃないじゃなくて私の作品に惚れたんです。どっちかという私の家族が好きなんですよ、最初から。ヨンヒに会ったことないのにヨンヒの家族に映画でたくさん会って、会ってる時も「ソナにお小遣いあげたい」―「いや、ソナもう30やから」とか「25過ぎてるから」とか。「ちっちゃいソナにお小遣いあげたい」とか。

彼に、「こういう証言があって、実は四・三のこんなことがあるんだけど」というと、びっくりして、彼こそ四・三の本を私以上にすごくたくさん読んでくれました。最初からオモニに会いに行く気満々だったんですよ。「オモニに会うためには四・三の本を読まなあかん」みたいなことで、ガンガン聞くわけではないけれども、ちょっと分かって行かなあかんって。人にインタビューをして本を書くのが仕事の人なので、本を作る人なんですね。取材に行って被災地とか、いろんな人のインタビューとかを雑誌の記事にすることもあるんですけど、長時間のインタビューで一冊エッセイや自叙伝みたいなを書いてあげたりとか、そんなのやってる人なんです。私は自分の話ばかりしてる、彼は他人の話ばかり書いてる人です。よく「何やってる人なんですか」って聞かれると、「記者です」って映画の中で言うじゃないですか。うちのオモニに「フリーのライターです」って言っても、ただの百円ライターかいなって思いそうでね、なんて説明しようかって。記者って言ったらなんとなく会社員みたいなイメージもあって安心するんちゃうかって。二人ともフリーなんで、すごい不安定なんですけど、記者ですって言い方をしたんですけれども基本的には思いっきりフリーです。

その彼が絶対映画を作ろうと。「これは長編映画にしなあかんのちゃうか」って言ったんですけど、私が「それちょっと too much で大変すぎる」って言って、「映画どんだけ大変か知ってる？」みたいな話になったんですが。オモニに彼が会いに行ったあの日ですね、ミッキーマウスのTシャツが出てきたあの日に、まさかオモニがああいうふうに歓待するとも思わず。あんなこう、なんて言うんでしょうね、外交官みたいだったんですよ、二人が。口論になる話題は一切出さず、「本当に金日成信じてるんですか？」みたいなことも言わないし、なんかお互いが気を悪くするようなことを一切聞かないし、でもなんかこう、美味しい美味しい言いながら、ニコニコしながら一緒にご飯を食べるっていうね、そういう二人を見て、この二人を追いかけたら映画になるなって思ったんです。これはもう賭けやなと思ったんですけど。その時は、まさかオモニが認知症にこんな早くなるとは思わなかったんですよ。オモニすっごくよく食べるし、よく寝るんで、100歳以上絶対行くと思ってましたし、だから最初、夫・荒井カオルとオモニを撮り始めて映画にする構想を練ってる時は、四・三の話も入れつつ、料理と、日本人の若いおもしろい変な兄ちゃんが来て、おもしろい家庭でね。だって普通、あの肖像画があってですよ、ドン引きしません？ 私がもし日本人の付き合ってる彼のところで天皇陛下とかバーンてあったりしたら、「うーん、なるほどなあ」「お友だちぐらいでいいかなあ」みたいに思うかもしれないですけど、全然迷わない。大したもんやなあと思って、それで、いろんなスープの料理があれば日韓の掛け橋みたいな楽しい美味しい映画になるんちゃうかって、軽いノリで最初は考えてて、いろんなスープを撮ってたんです、実は。オモニが彼に、コンタンとか、しっぽ汁とか、カルビタンとか、蜂の巣を炊いたやつとか、とにかくいろんな料理を教えていて、私はずっと撮っていたんです。

けれどもだんだん認知症が始まって、全然予想せずにこうなった。あと、文在寅政権になって朝鮮籍の人も入れますっていうことになって、70周年の慰霊祭にもオモニと一緒に参加できるようにもなりましたし。それも、いつかオモニと一回ぐらい済州島に行ければいいなと思いつつ、もう無理と思っていたんです。国籍だけではなく、やっぱり人生最後まで総連の活動

家をしてきた人なので、なかなか入国させてもらえないかなと思ったんですけど、あの時は本当によかったなと思って。それはもう必ず行こうってことで、オモニは最初は済州島を避けるような言い方でしたが、だんだん自分の胸の奥に押し込んでたことを語り始めると同時に、「行きたい」って言い始めたんですね。「ソウルも一回見てみたいわ、平壤ばっかり見たし、ソウルも一回見てみようか」って感じで。「済州島も一回行ってみる」って言って、済州島でのいい思い出も語ってくれたりするようになりました。惚気じゃないですけど、彼がいなくて私だけだったら、たぶんオモニの人生最後までお金の喧嘩してたんじゃないかなって本当に思うんですけど。やっぱり人が一人入ると、ワンクッションあると優しくなれるというか、そういうのもすごく、私も変わったしオモニも変わったし、すごく最後はいい時間が送れました。予想よりも認知症がすごく早く一気に進んだので、そういうことはあるんだなと思って。

でも本当に、すごくハッピーな認知症だったんです、うちのオモニの場合は。家族が全員向こうにいますので、結局オモニは息子3人みんな送って、自分の弟、妹も済州島から来たあとに北に送って、自分の両親も送ってるんです。私は、兄たちは北に行きましたが両親は日本にいましたけれども、うちのオモニはきょうだいも親も全部北に送ったから、本当に日本に一人だけ残って仕送りばかりしていたんですよ。だからもうオモニにとっては平壤とか朝鮮というのは、平壤を信じるしかないというか、信じないわけにはいかんということだったんだと思うんですけど。最後にいろいろカメラの前で今まで言わなかったこともたくさん言ってくれました。本当にこれ映画に入れていいのって思うくらいの組織に対する意見とかずけずけ言っていて。使いませんでしたけれど、そういう映画を作るというわけではないので。本当にいろいろ人間が年を老いて生きていくというのは、言いたいことを言わず、言葉をたくさん飲み込んで生きていくものなんやなというのもすごく感じました。

オモニの遺骨は東京の私の自宅にあります。コロナ以降、朝鮮が全部シャットアウトしているので、最近ちょっと中国との間はオープンし始めたとか、また閉めたとか、オープンし始めたとか言ってますけれども、手紙も送れなくなったんですね。だからコロナ以降の家族の健康状態と言いますか、その前までは手紙が来てたんですけど、もうちょっと分からなくて。またツアーとかですね、渡航が再開すれば、私と私のオモニが一番親しくしていた方がオモニの遺骨を持って行ってあげると言ってくださっていて、その時を今待っているという状態です。そんな感じですかね。…よう喋るでしょう！ ご質問があればー。

質問：四・三事件の調査団の方が2017年に来られ、オモニが映画の中で饒舌にお話しされてましたが、その後から認知症が進行したというナレーションがありました。やっぱりすごく重いことだなって。自分なら調査団が来て、しかも韓国の人に来て、その方々に喋ることってすごく重いなって思うんですけど、あれはどういう経緯で実現したのですか。

8. 済州四・三研究所調査団の訪問

うちのオモニがちょっとずつ四・三の話をし始めた頃から私は「四・三の集い」みたいな、毎年4月3日前後に大阪と東京で慰霊祭とかそういうことが行われているんですけど、そ

こに参加するようになって、「四・三の会—大阪」「四・三の会—東京」っていうのがあります。そこの責任者の方とも仲良くて、大阪の責任者の方は家が生野区ですからご近所で。ただ済州島の出身ということで行ってたんですが、だんだん「実はうちのオモニが」みたいに話すと、「えーっ」てなって。四・三のことを書いたり語ったり、詩にもなさっている^{キム・シジョシ}金時鐘さんと^{キム・ソクボム}金石範さん。金時鐘さんは詩人ですけど新書もいっぱい書いてて、とにかく本がたくさん出ていますので、ぜひ読んでください。金時鐘さんは昔、総連に初期の頃ちょっといらしたんですけど、その後は日本語で文学をするということで総連を抜けて。すごく正面から、間違っていることは間違っていると批判もする人なんですけど、その方がすごくうちの両親と仲良かったということが分かってですね。あと金石範さんという方は『火山島』という有名な大ロング小説を書いた方です。平凡社から、生きているのに全集が出ている数少ない作家です。金石範さんも金時鐘さんも最近、本当に、命の最後まで書くという感じで語ったり書いたりしてらっしゃいます。だいたい高齢なんですけれども、金石範さんにもそういう集会で会った時にご挨拶すると、「ヤンヨンヒさんのお父さんは面白い人でね、僕らが総連辞めた後、鶴橋の近所の飲み屋でばったり会って、他の総連の人と会って自分たちはもう抜けたからツンって感じなのに、いつも『おー来たんか』って言ってね、挨拶をしたり、いっぱい飲めやと言ってお灼してくれる」と。「ヤンヨンヒさんのお父さんはそういう性格の人で、それが『ディア・ピョンヤン』によく出てた」とかって言ってお話ししてくださって。私はびっくりして、そういうことがあったので、その時に私がちょっとずつ「実はうちのオモニが、とにかく妹と弟を連れてきたってという話を始めてます」っていうことは言ってたんです。すると、「四・三の会」と済州島にある「済州四・三研究所」はリンクしてますから。

済州四・三研究所は本当にすごくて、済州島に行ったらぜひ済州四・三平和公園に行ってください。広島平和公園みたいに犠牲者の名前がわーっとあるのもあるんですけど、四・三のことを展示してある博物館がとってもよくできています。とてもよくできていて、ちょっと辛い内容ですけど、もちろん。事前にちょっと本でも読んで博物館に行くと、もっと分かりやすいだろうし、どっちが先でもいいんですけど。韓国には四・三の絵本まで出てます。犠牲者のおばあちゃんの話聞いて、そのおばあちゃん、例えば顔に顎がないおばあちゃんが済州島にいて、このおばあちゃんの顎がなんでないんやっていうね、四・三の時に人を殺す弾が飛んできて顎が撃たれてっていう、そういうおばあちゃんの話とかいくつかあります。写真集とかですね、四・三の犠牲者の衣服だけを並べて写真集にしたり、いろんなのが出てるんですけど、そんな話をしていたら、ぜひ一度インタビューをしたいって言われてたんですよ。でもうちのオモニは「もうあんたのカメラで十分や」っていうね、テレビ局とかそういう他の人のインタビューは一切受けないっていうことをよく言ってたんですけど、四・三研究所が何をしてるかをずっと私が話したんですね。

四・三研究所の人たちは大統領が認める前、韓国が四・三についてまだタブー視してる時からずっと調査をして、調査してるからみんな監獄に入れられて、でも出てきたらまた調査をして、そういう集団が実際にいっぱいあるんですね。劇団も四・三のことを演劇にしたらみんな捕まって、刑務所入れられて、出てきたらまた四・三の芝居をするみたいなことをやって

た劇団も。今は無くなったのかな、ハルラサンという劇団もあったり、いろいろあるんですけど、とにかくそういう人たちが多い。それが、韓国が民主化されて、国のお金でその人たちが堂々と調査するようになって。今は済州島の空港を掘ると骸骨がいっぱい出てくるって言うんですよ、四・三の時の。一人一人をちゃんと葬ってないんです。もうぐしゃーって、ダダダダって皆殺しにした遺体を全部穴掘って捨てたって。それを上から埋めて空港の一部の土地の上からコンクリートで埋めただけだと。長年それをタブーにしてたんだけど、それをまた掘り起こす。最近その先生なんかは掘り起こす作業にも参加なさっているんですけど、掘り起こすと子どもの骨とか、庇いあっているような人の骨が出てきたって言うんですよね。そういうこともなさっているし、その骨を発掘するだけでなく DNA 検査までやっています。それで誰がどこで殺されたかまでちゃんと突き止めるという調査を行っている団体です。四・三平和財団というのもありますし、四・三研究所というのもあるんですけど、世界各地でたくさん今カンファレンスとかもやっています。

韓国にいとね、「人が死んだやんか」って言うんですよ。「人が死んだのになんでこんな黙ってられるねん」とかね。「人が死んだから文句言わなあかん」とか、一人一人の死とか命が軽視されることに対して庶民たちがすごく憤ってデモをしたり抗議をしたりするというのは、私はすごいなというより、これが本当なんやろうなと。日本にいとなんとなくしょうがないなと思っているような気がするんですけど、人が死んだんやから、誰が死んだか分からなあかんし、どう殺されたか、どこで殺されたか、あとご遺族にまでそれを報告して賠償せなあかんところまでいきます。今は遺族に対する賠償も始まっています。もちろんそれいろいろな問題がありますけれども、本当に膨大な仕事だと思うんですが。

その話をオモニにして、そういう人たちがオモニの話を聞きたいねんって言うたら、「オモニの話を聞くために来るんかいな」と。オモニだけの話のために済州島からわざわざ来るわけじゃないんですけど、「そう、オモニのためだけにわざわざ済州島から来はるねん」と言ったら、だいぶ歳とってましたけど、認知症ちょっと始まったかなぐらいだったんですけど、「まあ、ほな一回会うたろか」みたいな感じで。その2、3年前ぐらいからオモニも四・三の大阪の集まりなんかにも顔出すようになってたので、総連の集まりしか行ったことなかったんですけど、それはやっぱり行っとかなあかんと言うようになって、大阪の生野区や東成区とかである慰霊祭なんかにも顔出すようになってまして、それで「じゃあ一回会いましょうか」ってことになって、あの方々が来ました。

実は1人か2人いらっしやると思ったんですけど、映画には映ってない所にもいっぱいいて、あの狭い部屋にぎっしり、日本の大学で四・三の研究をなさっている先生たちもいらして、そしたらオモニにしたら「うちの話聞きに来たんよね、この人たち」みたいな、すごいテンション上がって、なんかすごいサービス精神が触発されたみたいで、びっくり3時間語りました、あの日。で、私、熱出して倒れるんちゃうかなって思ったんですけど、滔々と話したんです。それで、映画に映っているのは四・三研究所の所長、元所長、大阪の会の会長さんと大体3人で、映ってないところに1人研究所のなんかすごいエキスパートの方がいらして、で、オモニが言うんとか村、オモニの故郷の、オモニが住んでた家の近所の、あの四つ角に大き

な木があるでしょ、とか言って、「ああ、あった、あった」とか言って、「その横に交番所があったんですけど、あの交番は警察がみんな悪いって有名だったんですよー」って言ったら、オモニが「いや、それが1人だけいい人おってん」って、こうなるわけですよ。私とか荒井カオルがいくら本を読んでも、そんな質問はできないわけです。あの大きな木の横に交番があったでしょ、なんて言えないわけですよ。でも来た人たちは済州島生まれだし育ちだし、何十年も四・三の生存者たちを探して探して、たまには断られて、塩撒かれたりしながらも、ずっと聞き取り調査をしている方々なので、もうすごいベテランなんですよ。聞き出すのもそうだし、共感するのもそうだし。それで、そういうふう、「1人だけいい人」って、「そうですか、名前？」—「名前までは、それは分らんけどな」って言ったり、そういう感じで一つ一つのやりとりがびっくりするぐらい具体、具体、具体、もうディテールの嵐みたいな感じになって。それはやっぱりね、インタビューっていうのはインタビュアーの準備と資質というか、知識がどんだけ大事かということ。だからテレビでよく「何々に迫りました」とか言って初対面なのに喋ってくれたんで得だね、みたいにやってるけど、いやいやいや！なんか本当にすごいなって、この人たち。このしんどい話を何十年も聞き続けてね、でも「今日はいろいろヨンヒさんのオモニはすごく明るく語ってくれるので」って。

最後にこんな話をするんですけど、その中で生き延びたっていう話もあれば、こういうふうには殺されたっていう話もいっぱい聞くわけで、乳飲子の赤ちゃんを足持って岩にぶつけて殺したりするんですよ。そこまでできるってことですよ、人間狂うと。同族も何も関係ないですよ、同じ人間じゃないですか。イデオロギーが違うからって、赤やからって何やねんと思うんですけど。今もね、世の中殺し合いをずっとしてて。子どももいっぱい殺してるけれどもね、「結局こいつも赤の子どもや」って殺すわけでしょ。赤が何かも知らん農民までね、同じ村におるとか言ってみんな村を丸焼きにしたりね。なんか本当に、そういう話を何十年聞きながら、よくこの人たちが鬱にならなかったなと思う、そういうエキスパートばかりなんですよ。だからオモニは、まさかそういう話し合いになるとは思わなかったみたいで、たまには済州島の方言で聞いてくださるのでオモニはもっと「ああそうそうそうそう」とかって、もう私と荒井には全然見せなかった表情もすごいビビッドだったし、婚約者の名前まで出てきて、あの日はね、ちょっとオモニがハイになりすぎて心配したくらいだったんです。ポーンと切れちゃうんじゃないかなと思ったくらい。

9. 認知症のオモニとの対話

その後1週間か2週間くらいかけてですけど、だんだんだんだん、ガーンって認知症がひどくなった。急に徘徊するとかでもないんですけど、「アボジどこ行った」とか、自分の弟ね、北朝鮮で既に先に死んでるんですけど、四・三から一緒に逃げてきた弟のことを「どこ行った」とか探すようになりました。明かりがピコンピコンってなるあれは本当に偶然撮れたんです。たまたま階段の電球が切れかけてたんですけど、本当にこんなことがあるのかと思って。明かりがピコンピコンってなるとすぐ電球を替えるオモニだったのに、すぐ替えてないっていうのも、オモニがぼーっとちょっとしてるのもあって、私が行ったばかりで替えなあかんとな

思ってたんですよね。そしたらオモニが亡くなった自分の弟を探し出したりしたんですけど、もう生きてない人たちを探すっていうか呼ぶっていうのが、どんどん始まっていったってことです。でもさっき言った、オモニの場合すごくラッキーというか、幸せな認知症だったというのは、もうみんな一緒にあの家で暮らしてるっていう妄想になったので心配事がなくなったんですよ。だから、3人の息子、孫、弟妹、自分の両親もあの鶴橋の家と一緒に暮らしてるって言うんですよ。「いつおうたん？」—「朝おうたで」って言うんですよね。だから私も夫も「よかったな、すぐ帰ってくるわ」って言って終わり。

今もし認知症のご両親のことで悩んでらしたり、その時が来たらどうしたらいいんやとか思ってたっしょと思うんですけど、絶対否定するなってお医者さんに言われたんですよね、親御さんが言うことを。どんな変なことを言っても、そうやな、そうやな、って言ってあげなアカン。「何言うてんの、オモニ、アボジ死んだやんか、しっかりしーや」なんて言うと、これはすごいストレスになって、そのストレスが血管にすごい悪いんですよって言われたんで、「血管に悪いんですか」って言って、それ絶対アカンわと思って、「分かりました」って。で、割り切ったんです。病気やから仕方がない、精神病やと思ったらいいんですよ。すごいハッピーな精神病じゃないですか、みんな一緒におるって言うからね。

あと記憶がだんだん忘れっぽくなるんですけど、1週間もたなくなつて、5日もたなくなつて、1日もたなくなつて、3時間もたなくなつて、5分もたなくなつて、だんだんね、10秒もたないぐらいになってくるんですよ。だから10秒ごとに同じことを聞いたりもするんですよ。そういう時に、「何回同じことを聞くの」とか言わずに、サクッと軽く短く答えてあげる。それで本人は安心すると。否定が一番いけないらしいんです。これがなかなかできないらしいんですよね。「しっかりしーや」になっちゃうらしいんですよ。それはたぶん、ちょっと壊れたような母親だったり父親を受け入れられないとか、夫や妻を受け入れられないということになるらしいんですけど、くれぐれも、そうなる自分がしんどいので割り切ってください。病気やからしょうがない。合わせてあげたら本人もハッピー、自分も楽やし。晩ご飯食べたのすぐ忘れてもするらしくてね。ご飯食べようかって一日何回も言うっていうね。そういうのもイライラしたりとかね。「ご飯食べようか」—「うーん、そやな」って言ったらね。それで本人は納得するんですよ。最初はそれが分からなくて、「何食べたい」って聞いて。そのあとずっと会話を続けなアカンと思ってね。シミュレーションしちゃうじゃないですか。シミュレーションしてめっちゃ疲れてるのに、またちょっとしたらすぐまた同じこと聞かれるし、どうしたらいいのかなと思ってたんですけど、お医者さんにね、「言ったことは10秒したら忘れてますんで、だから同じ答えでいいんです」って。だから、「アボジどこ行った」って言ったらね、「今日は本部に行った、総連の本部に行った」って言ってね。「今日は兵庫に行った」とかね。今日はちょっと違うこと言わなアカンって最初は思ってたんですよ。仕事とか本部、それだけでいいらしいです。すると安心するらしいです。

一言で言えるような簡単なことではないですけど、とにかくそういう幸せな妄想で、最後の妄想の中でぐらいいね、会えない家族と一緒にいれたっていうのだけが幸いだったかなと。みんなが一緒にいるっていう安心感なのか、オモニはニコニコするようになって、毎日朝から晩ま

で絵本を見ていました。絵本を見ているとすごい落ち着くみたいです。絵本を見ながら、「うちや」とか言ったり、「これあんたや」とか言ったり、話を勝手に作って話してくれるようになって、絵本めっちゃ買わなあかんと思って、昨日も読んだし、毎日読むから新しい絵本をたくさん買わなあかんと思ってたら、読んだ絵本もね、読んだことすぐ忘れるんですよ。1冊でよかったんやっていうのをね、15冊くらい買った後で気づいたんですけど、ずっとそうやって絵本をたくさん読んでいました。

子どもの身からすると、親にできることなんてもう少ないですけども。まだアボジのもとに遺骨を持って行ってあげられてないのと、やっぱりうちのアボジもそうでしたけど、最後に息子や孫たちに会わせてあげたかったなというのはありましたが、でも幸い、一番最期の瞬間は、アボジの時は私とオモニがそばにいたり、オモニにもそばには私とカオルがいたりもしましたし。コロナ禍だったんですけど、幸いね、担当の先生がね、「コロナやからってね、亡くなった後で遺骨を渡すとかね、最期の瞬間も会わせない、そんな非人道的なことは僕は嫌です」って言ってね、本当に月に1回ぐらい、10秒ぐらいですけど面会をさせてくださりまして、最期の瞬間も2分ぐらい病室にすることができました。本当にラッキーなほうだったなというふうに思っています。

今日はこんな感じでお時間となってしまいました。『ディア・ピョンヤン』『愛しきソナ』『スープとイデオロギー』の裏話がいっぱい書いてある『カメラを止めて書きます』というエッセイが出ておりまして、映画より面白いです、いやいや、そんなことない！いろんなことが本当に、今話したことのもっと深い話とか、荒井との馴れ初めとかアホな話もいっぱい書いてあります。よろしければどうぞ。ありがとうございました。

(記録：南出和余)